

「アート・ノンフィクション」

山口情報芸術センターの挑戦

開館記念展「アモダル・サスペンション」
「メディア・ソケット」

白坂ゆり 取材・文

11月1日にオープンしたYCAM(ワイカム)は
メディア・アートを専門にしたこれまでにない
新しいコンセプトのアートセンター。

だれもがどこからでも自在に

情報を配信できる時代のミュージアムは、

都市ではなく地方から、超高層ビルの最上階ではなく

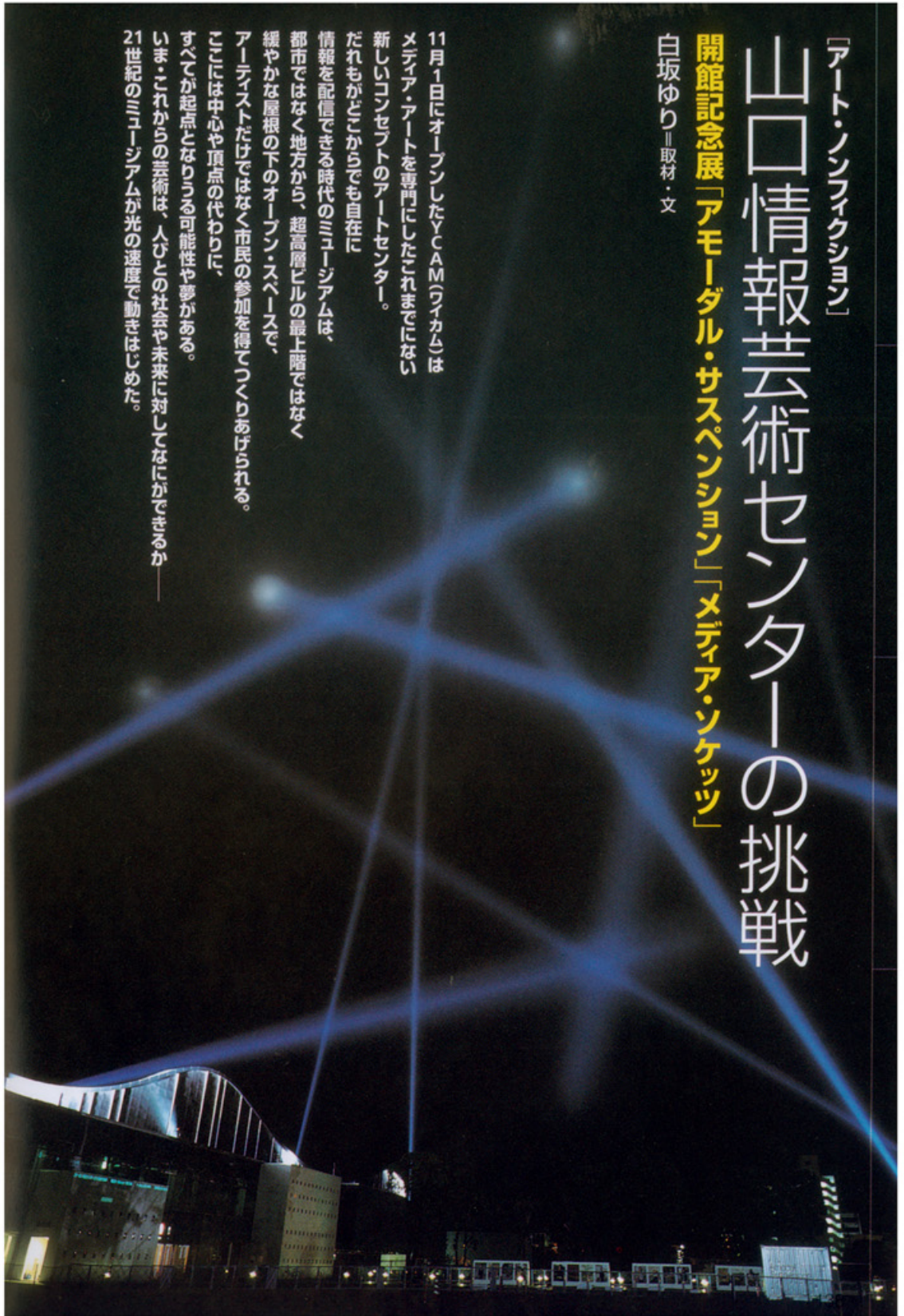
緩やかな屋根の下のオープン・スペースで、

アーティストだけではなく市民の参加を得てつくりあげられる。

ここには中心や頂点の代わりに、

すべてが起点となりうる可能性や夢がある。

いま・これからの芸術は、人ひとの社会や未来に対してなにかができるか
21世紀のミュージアムが光の速度で動きはじめた。





Amodal Suspension

ラファエル・ロサノ＝ヘメル
「アモーダル・サスペンション—
飛びかう光のメッセージ」

20本のサーチライトは圧巻。携帯電話やインターネットからメッセージを送信すると、光の信号に変換され、ライト間をリリースし、上空に光の網目が形成される。画面上で光をキャッチして受信もでき、YCAM正面のボードでもメッセージが公開された。ウェブサイトでは、ライブ中継が行われ、アーカイブも設置。「ライ麦畑でつかまえて」にかけた「Catcher in the light」なんて言葉もありました。www.amodal.net 展覧会=2003年11月1日—11月24日で終了

十一月一日、山口情報芸術センター(YCAM、愛称ビッグウェーブやまくち)がオープンした。山並みをモチーフにした二階建てのガラス張りの建物(総面積一万四千八百七十四平方メートル)は、磯崎新の設計による。建物内には、公演や展示ができるスタジオ、市立図書館、ラボなどを備える複合文化施設。コレクションはもたない。メディア・アートの展覧会をはじめ、ダンスや演劇などシアター系の多彩なプログラムが目白押しだ。

ちなみに、十一月二日、一日の間に私が見たものは、開館記念展「メディア・アングレック」、フィリップ・ドゥクフの新作ダンス公演「イリス」。図書館にもレストランにも行った。夜は、ラファエル・ロサノ＝ヘメル「アモーダル・サスペンション」、取材がなければ映画「アバートの鍵貸します」も見られたに違いない。これは、オープニングだからではなく、その後の日程にも、イデリアン・クルーのダンス、大友良英のライブなどが入っている。

ここ一か所、いろいろなことが同時に起きている。東京より充実してい

るのでは。それがYCAMの印象だ。

新しいまちづくりと
メディア・アートの出会い

YCAMは、山口市内の中央部にある。背景には、山口市が取り組む「やまくち情報文化都市づくり」がある。前市長が、「情報」という観点から新しい産業の育成を図り、また、文化を基盤に若い世代に活気を与え、都市の活性化につなげようと考えたものだ。

山口の街は、小京都といわれる甚盤の目の構造からなる。YCAMのある県道沿いには、湯田温泉という温泉街があり、中原中や山頭火の句碑もある。また、離れた場所には、山口県立美術館、県立博物館、県立図書館、県庁へと並木道が続くモダンな文化通りがある。YCAM周辺は、NTTやケーブルテレビ(益地のため普及率八パーセント)、NHKといった情報産業の新エリアなのである。商店街の夜は早い。大学は多いが、同時代のカルチャーに触れる機会が少ない。

のどかな街にあって、YCAMに疑